

Oracle Diagnostics, Tuning, Change Management Pack

日本語リリース・ノート

リリース 2.2

2001 年 6 月

J03360-02

原典情報: Readme for Oracle Change Management, Diagnostics and Tuning Packs Release 2.2.0.0.0
(A85214-02)

目次

1. 概要	3
1.1 この文書の目的	3
1.2 リリース 2.2 製品コンポーネント	3
1.3 日本語 Quick Tour CD-ROM	4
1.4 インストール	4
2. 互換性一覧	5
2.1 データベースの互換性	5
2.2 Intelligent Agent と Oracle Server	5
2.3 Enterprise Manager リリースと Intelligent Agent	6
2.4 Enterprise Manager 製品と Management Server / リポジトリ	6
2.5 Intelligent Agent と Management Pack	7
3. Oracle Management Pack 全般	7
4. Oracle Enterprise Manager	8
4.1 新機能	8
4.2 コンソール	11
4.3 イベント・システムおよびジョブ・システム	12
4.4 グループ	14
4.5 ポケットベルおよび電子メールのブラックアウト	15



Oracle と Oracle のロゴは Oracle Corporation の登録商標です。Oracle Enterprise Manager は、Oracle Corporation の商標です。記載されているその他の製品名および社名はその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれ該当する所有者の商標です。

4.6	DBA Management Pack	15
4.7	Oracle Management Server (OMS)	16
4.8	Enterprise Manager Configuration Assistant.....	18
4.9	Enterprise Manager Migration Assistant.....	18
4.10	ブラウザベースの Enterprise Manager	18
4.11	統合アプリケーション	19
4.12	その他.....	20
5.	Oracle Change Management Pack.....	22
5.1	新機能.....	22
5.2	警告および既知の問題	22
6.	Oracle Diagnostics Pack.....	28
6.1	新機能.....	28
6.2	警告および既知の問題	28
7.	Oracle Tuning Pack	38
7.1	新機能.....	38
7.2	警告および既知の問題	38

1. 概要

1.1 この文書の目的

このリリース・ノートには、Oracle Change Management Pack, Oracle Diagnostics Pack, Oracle Tuning Pack (以下 Oracle Management Pack) リリース 2.2 製品と、ドキュメントに記載されている機能との相違点が記載されています。 Oracle Management Pack のマニュアルに関する情報と、このリリースに関する最新情報も記載されています。

1.2 リリース 2.2 製品コンポーネント

コンポーネント名	リリース番号
Oracle Management Server	2.2.0.0.0
Oracle Enterprise Manager Migration Assistant	2.2.0.0.0
Oracle Change Management Pack	2.2.0.0.0
Oracle Diagnostics Pack	2.2.0.0.0
SQL Server Monitoring Option	2.2.0.0.0 *
Diagnostics Pack Documentations	2.2.0.0.0
Oracle Tuning Pack	2.2.0.0.0
Oracle Enterprise Manager Events	2.2.0.0.0
Oracle Diagnostics Pack Advanced Events	2.2.0.0.0
Oracle Management Pack for SAP R/3 Advanced Events	2.2.0.0.0 *
Oracle Management Pack for Oracle Applications Advanced Events	2.2.0.0.0
Oracle Enterprise Manager Pack Client	2.2.0.0.0
Oracle DBA Management Pack	2.2.0.0.0
Oracle Schema Manager	2.2.0.0.0
Oracle Storage Manager	2.2.0.0.0
Oracle Security Manager	2.2.0.0.0
Oracle Instance Manager	2.2.0.0.0
SQL*Plus Worksheet	2.2.0.0.0
Oracle DBA Studio	2.2.0.0.0

Oracle Enterprise Manager Integrated Applications	2.2.0.0.0
Oracle interMedia Text Manager	2.2.0.0.0
Oracle Spatial Index Advisor	2.2.0 *
Oracle Directory Manager	2.1.1.0.0
Oracle Forms Server Manager	2.2.0.0.0
Oracle Enterprise Security Manager	2.0.0.1.0
Net8 Integration	8.1.7.0.0
Oracle Enterprise Manager Migration Assistant	2.2.0.0.0
Oracle Enterprise Manager Web Site	2.2.0.0.0
Oracle HTTP Server	1.3.12.0.1a
Oracle HTTP Server Extentions	8.1.7.0.0
Apache Module for Oracle Servlet Engine	8.1.7.0.0
Oracle Mod PL/SQL Gateway	3.0.0.8.0
BC4J Runtime	3.2.1
Apache Configuration for Oracle XML Developer's Kit	8.1.7.0.0
Oracle Enterprise Manager Quick Tours	2.2.0.0.0
Enterprise Manager Documentations	2.2.0.0.0
Oracle Enterprise Manager Paging Server	2.2.0.0.0

注 1: コンポーネントは製品メディアに含まれる製品コンポーネント一覧を記載したもので、製品ライセンスとは対応していません。

注 2: *印のついているコンポーネントは、日本ではサポートされません。

1.3 日本語 Quick Tour CD-ROM

Oracle Management Pack リリース 2.2 内には、英語版 Quick Tour が含まれています。日本語版 Quick Tour を参照する場合は、添付の日本語 Quick Tour CD-ROM を使用してください。

1.4 インストール

1. Enterprise Manager Web サイトをインストールする場合、「サマリー」ページに一覧表示される領域要件に加えて、一時ディレクトリに 150～200MB 程度の空き領域があることを確認してください。この領域は、インストール中に Installer がファイルの中間処理を行うために使用します。Windows NT プラットフォームでは、一時ディレクトリは TEMP システム環境変数で指定します。Solaris では、/tmp にあります。（Bug#1357839）

2. サイレント・インストール中、リポジトリを作成/編集する Enterprise Manager Configurations Assistant (EMCA) は自動的に起動しません。サイレント・インストール終了後、手動で EMCA ツールを起動してください。(Bug#1379570)

2. 互換性一覧

2.1 データベースの互換性

Oracle Management Pack リリース 2.2 は、7.3.4、8.0.6、8.1.x のバージョンの Oracle データベースに対応しています。

2.2 Intelligent Agent と Oracle Server

Oracle Intelligent Agent は、同一リリースまたは旧リリースのデータベースと互換性があります。しかし、旧リリースの Intelligent Agent と、それより新しいリリースの Oracle データベースは互換性がありません。新しいリリースの Intelligent Agent を使用して、旧リリースのデータベースを管理する場合、Intelligent Agent は、それ自身の Oracle ホーム、または Intelligent Agent と同じバージョンの Oracle ホームにインストールする必要があります。

次の表に、Intelligent Agent の各リリースと Oracle Server の各リリースとの互換性を示します。Intelligent Agent のリリースが特定のサーバー・リリースで動作することが確認されている場合、その項目に「あり」と記されています。Agent が特定のサーバー・リリースで動作することが確認されていない場合、その項目に「なし」と記されています。補足コメントは注記されています。

Oracle Server リリース番号					
Intelligent Agent リリース番号	7.3.4 注 1	8.0.6	8.1.5	8.1.6	8.1.7
Intelligent Agent v7.3.4	あり	なし	なし	なし	なし
Intelligent Agent v8.0.6 注 2	あり	あり	なし	なし	なし
Intelligent Agent v8.1.5 注 2	あり	あり	あり	なし	なし
Intelligent Agent v8.1.6 注 2	あり	あり	あり	あり	なし
Intelligent Agent v8.1.7 注 2	あり	あり	あり	あり	あり

注 1: 個別にライセンス契約が必要な Management Pack の一部の機能は、7.3.4 以前のリリースでは使用できません。制限の詳細は、各 Management Pack の項目を参照してください。

注 2: Intelligent Agent リリース 8.0.6 および 8.1.x には、データ収集サービス (Data Gatherer) が付属しています。

2.3 Enterprise Manager リリースと Intelligent Agent

Oracle Management Pack リリース 2.2 は、Intelligent Agent リリース 7.3.4 以上のバージョンに対応しています。

ただし、Windows NT で実行中の Intelligent Agent とともに Enterprise Manager リリース 2.x を実行するには、リリース 8.1.5 以上の Intelligent Agent を使用するか、既存のリリース 7.3.x または 8.0.x の Intelligent Agent を Intelligent Agent パッチ・リリース 7.3.4.1 または Intelligent Agent リリース 8.0.6 以上にアップグレードする必要があります。これらのパッチのいずれかを入手するには、オラクル社カスタマ・サポート・センター担当者にご連絡ください。

2.4 Enterprise Manager 製品と Management Server / リポジトリ

Enterprise Manager コンソール、DBA Management Pack、個別にライセンス契約が可能な Management Pack、Management Server およびリポジトリは、すべて同じリリースのものである必要があります。たとえば、リリース 2.1 の Management Server とリポジトリをリリース 2.2 のコンソールとともに使用することはできません。また、リリース 2.1 の Management Server とリポジトリをリリース 2.2 の Management Pack とともに使用することはできません。Enterprise Manager リリース 2.2 製品では、リリース 2.2 の Management Server とリポジトリを使用する必要があります。これは、次のいずれかの製品が参照するためです。

Oracle Enterprise Manager コンソール

Oracle DBA Management Pack

Oracle Tuning Pack

Oracle Diagnostics Pack

Oracle Change Management Pack

Oracle Management Pack for Oracle Applications

Oracle Standard Management Pack

既存の Management Server とリポジトリのバージョンが古い場合は、最新のバージョンに移行またはアップグレードできます。Management Server とリポジトリをリリース 2.2 に移行またはアップグレードする場合、リポジトリとともに使用する Enterprise Manager 製品がすべてリリース 2.2 であることを確認してください。たとえば、Diagnostics Pack リリース 2.1 や Change Management Pack リリース 2.1 をまだ使用しているのであれば、Management Server とリポジトリはリリース 2.2 にアップグレードしないでください。使用するリリース 2.2 の Management Pack ソフトウェアを取得する前に、Management Server とリポジトリをリリース 2.2 にアップグレードすると、古い Management Pack 製品は使用できなくなります。

移行とアップグレードの詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

2.5 Intelligent Agent と Management Pack

ジョブおよびイベントに関連するこのリリースの新機能すべてを利用するには、バージョン 8.1.7 の Intelligent Agent が必要です。旧バージョンの Intelligent Agent のジョブおよびイベントは、リリース 8.1.7 の Intelligent Agent に含まれます。

注意: Intelligent Agent は、最新のものを新しい Oracle ホームにインストールすることを強くお勧めします。これにより、古い技術スタックを必要とする Oracle 製品に影響を与えることなく Intelligent Agent をアップグレードできます。

3. Oracle Management Pack 全般

マルチバイト環境では、Enterprise Manager コンソールから特定の Oracle Management Pack アプリケーション (Performance Manager、Capacity Planner および Change Manager) を起動すると、実行中の同じコンソールから続いて起動した他のアプリケーションでは、テキストが正常に表示されない場合があります。コンソールで後から起動した場合にこのような影響が見られるアプリケーションは、TopSessions、SQL Analyze、Index Tuning Wizard、Oracle Trace Manager、Oracle Trace Data Viewer および Oracle Expert です。このような問題を避けるために、マルチバイト環境では、Performance Manager、Capacity Planner および Change Manager をコンソールからではなく、Windows の「スタート」メニューから起動することをお勧めします。万一この問題が発生した場合は、コンソールを再起動し、コンソールから TopSessions 、SQL Analyze 、Index Tuning Wizard 、Oracle Trace Manager 、Oracle Trace Data Viewer および Oracle Expert を起動すると修正できます。(Bug#1344568 および 1714960)

4. Oracle Enterprise Manager

4.1 新機能

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 には、次の機能が追加されました。

4.1.1 Enterprise Manager コンソール

- コンソールのフォント・サイズ設定の変更。
- コンソール内の全ノードのリフレッシュ方法の強化。
- ノードおよびエージェントの詳細をコンソールのナビゲータから表示できます。この情報を表示するには、ナビゲータ・ツリーでノードを右クリックし、表示されたメニューから「プロパティ」を選択します。ノードで Intelligent Agent リリース 8.1.7 が稼働している場合は、オペレーティング・システム情報も表示されます。

4.1.2 パフォーマンスの向上

コンソールおよび DBA Studio のパフォーマンスを向上させるため、大幅な改良が加えられました。次の操作を行う際のパフォーマンスが向上しています。

- コンソールおよび DBA Studio の起動
- コンソールのナビゲータ・ツリーの拡張
- ナビゲータ・ツリーで選択したオブジェクトの詳細表示

ブラウザベースのコンソールの場合、Web サーバーに初めて接続する際には、jar ファイルをダウンロードする間、進捗ダイアログが表示されます。

4.1.3 Apache Web サーバーおよび Apache for iAS Web サーバーのサポート

検出、ステータス・イベント、ジョブおよび通知などの新機能により、一般的な Apache および iAS Apache Web サーバーの中間層環境を管理できます。パフォーマンス監視、拡張イベントおよびレポートなどの拡張機能が Diagnostics Pack に組み込まれています。

基本的な管理およびイベントの詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』の第 2 章「ナビゲータ」を参照してください。

拡張イベントおよびパフォーマンス監視の詳細は、『Oracle Enterprise Manager Oracle Diagnostics Pack スタート・ガイド』の第 5 章「Oracle E-Business Management Tools」と第 7 章「Oracle Advanced Event Tests」を参照してください。

4.1.4 ジョブ・システムおよびイベント・システム

4.1.4.1 イベント・システムに追加された新機能

- 新しいオペレーティング・システム固有のノード・イベント
- 拡張されたノードの動作・停止イベント
- Intelligent Agent リリース 8.1.7 による重複イベントのサポート
- イベント・テストの状況依存ヘルプ
- ターゲット・サブコンポーネントの拡張された監視

詳細は『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』の第 5 章「イベント」を参照してください。

4.1.4.2 ジョブ・システムの新機能

- ジョブ・タスクの状況依存ヘルプ
- 電子メール通知にジョブ出力を含めるオプション

4.1.5 拡張通知

- ポケットベル・サーバーが、Intelligent Agent を必要としない独立したサービスになりました。コンソール内からポケットベル・サーバーを構成することもできます。
- 拡張通知（ポケットベルおよび電子メール）のコンテキストとフォーマットをコンソール内からカスタマイズできるようになりました。イベントおよびジョブ・ステータス通知に応じて、電子メールおよびポケットベルに異なるフィルタを指定することもできます。

詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』の第 1 章「コンソール」を参照してください。

4.1.6 エンタープライズ・レポート

Management Server で管理している全ターゲットの詳細を含む HTML レポートを生成できるようになりました。レポートに含まれる情報は、イベント警告、スケジュール済ジョブ、グループおよび検出済サービスです。ウィザードを使用して、これらのレポートが定期的に生成されるように設定できます。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』の第 1 章「コンソール」を参照してください。

また、オブジェクト定義、オブジェクト従属情報およびデータベース構成の HTML データベース・レポートや、カスタム問合せなどのその他のレポートも生成できます。詳細は、Enterprise Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。

4.1.7 DBA Studio

- リソース管理の強化: リソース消費グループのリソース計画を作成するウィザード、リソース消費アクティビティのグラフィカル表示、リソース計画スケジューリングのサポート。
- データベースへの接続時にアプリケーションが行った DDL および DML の全変更のロギング。
- Replication Manager の強化: DBA Studio へのレプリケーション管理の統合、ツリーおよびプロパティ・ページの直観的な新しいレイアウト。
- JServer オブジェクトの参照、クラスの実行、リンクおよびディレクトリの作成、およびセキュリティ・オプションの指定。
- データベース・オブジェクトの DDL の表示。
- 分析ウィザードは、8i の新しい統計生成方法 (DBMS_STATS) をサポートしており、データベースに対して分析をただちに実行できます。
- マテリアライズド・ビューの強化: ジョブ・システムを使用したマテリアライズド・ビューの作成/移入、作成後に分析を行うオプション。
- バックアップ・ウィザードでのイメージ・コピー。
- 従属オブジェクトをリストとツリーのいずれかで表示し、表示からオブジェクトを直接編集。
- 表への列権限の付与。
- データ管理ウィザードでのジョブのエラーおよび警告に対する失敗と成功のインジケータ。
- レンジ・パーティション化の新しいグラフィカル・インタフェース。
- フォント設定の変更。

4.1.8 OMS チューニング用パラメータ

特殊な状況の下では、特定の OMS チューニングが必要な場合があります。チューニングを行うには、一部の OMS 構成パラメータを設定します。

設定するパラメータは、次のとおりです。

- oms.vdp.ping_interval
- oms.vdg.max_out_conns
- oms.vdg.max_in_conns
- oms.repository.connect_timeout

- oms.repository.connect_numTries

詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

4.1.9 Intelligent Agent バージョン 8.1.7

- 複数のネットワーク・インタフェース・カード (NIC) の明確なサポート: この機能により、Intelligent Agent はマシン上の主 NIC で受信ジョブ/イベント要求をリスニングできます (デフォルト)。その他のオプションを使用すると、Agent によるリスニングをユーザー指定の NIC と全 NIC のどちらで行うかを構成できます。
- 重複イベントのサポート: この機能により、同じパラメータを持つ重複イベント・テストを同じターゲット (データベース、リスナーなど) に対して登録できます。
- データ収集用移行ユーティリティ: nmumigrate という新しいコマンド行ユーティリティにより、ユーザーは、既存 Intelligent Agent の Data Gatherer で実行されている既存のデータベース収集を、Intelligent Agent リリース 8.1.7 の Data Gatherer で認識される新しいフォーマットに移行できます。
- Intelligent Agent リリース 8.1.7 へのアップグレード時に、既存の Enterprise Manager のジョブまたはイベントを移行: この方法により、ユーザーは既存のジョブまたはイベントを手動で素早く移行することができます。ジョブまたはイベント・ライブラリに保存してから、登録解除して再発行する必要はありません。
- MS Windows NT での自動スタートアップ: 特定の状況では、Intelligent Agent および Data Gatherer サービスがインストール後に自動的に起動されます。

注意: これらの機能および強化の詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

4.2 コンソール

1. コンソールの起動後に別のウィンドウを選択した場合、ログイン・ダイアログが手前に表示されません。アクティブなウィンドウをすべて最小化するか、[Alt]+[Tab]を使用してコンソール・アプリケーションを選択し、ログイン・ダイアログを手前に表示する必要があります。(Bug#806713)
2. コンソールからの接続用に Management Server 名を設定するときには、ノードの完全修飾名(foo.us.oracle.com など)を使用することをお勧めします。完全修飾名を使用しないと、Management Server と同じ DNS ドメインに属していないマシンでコンソールが実行されている場合に、一部の Management Pack ツールをコンソールから起動できない可能性があります。完全修飾名を使用してもコンソールから一部のツールを起動できない場合は、ローカルの'hosts'ファイルに、Management Server が実行されているホストの IP アドレスを示すエントリを追加してください。
3. 1 つのウィンドウで項目を選択したときに、その前に選択した項目がクリアされないため、2 つの項目が同時に選択されているように見えます。最後に選択した項目

が実際に選択されている項目です。通常、新しいウィンドウで別の項目を選択すると、この問題を解決できます。(Bug#618771)

4. コンソールのトレース・パラメータにおける構文の変更

すべてのクライアント・トレース・パラメータから OEM.接頭辞が削除されました。現在のトレース・パラメータは次のとおりです。

TRACING.ENABLED

TRACING.LEVEL

\$ORACLE_HOME¥sysman¥config ディレクトリにある clientconfig.properties ファイルに、これらのパラメータを追加してください。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

5. コンソールおよび DBA Studio からデータベースを起動した場合、日本語環境では起動時刻やセッション情報が文字化けする場合があります。一度データベースとの接続を切断し、再度接続していただくことで、正常に表示されます。
6. コンソールのナビゲータ・ウィンドウ上の「データベース」を右クリックして表示される「関連ツール」メニューが正常に表示されない場合があります。この場合、コンソールの「ツール」メニュー、またはナビゲータ左のランチ・パレットよりツールを選択して起動してください。(Bug#1721004)
7. ヘルプの「トピック検索」ウィンドウの「プリンタ・アイコン」を説明するポップアップ表示が正常に表示されません。「トピックの印刷(&P)」と表示されるべき説明文が「ツクの印刷(&P)」と表示されます。
8. コンソールのランチ・パレットにマウスのカーソルを移動すると、マウスポインタが砂時計の状態になる場合があります。

4.3 イベント・システムおよびジョブ・システム

1. イベントの手動消去

次の 5 つの拡張イベントは自動的に消去されません。

データベース警告

データ・ブロック破壊

セッション終了

アーカイバの停止

Data Gatherer 警告

つまり、これらのイベントのいずれかが発生し、問題が手動で解決された場合、問題が解決されたことを自動的に検出する方法がないため、イベントは自動的に消去されません。

したがって、イベント発生の原因となった問題の解決後には、次のようにしてイベントを手動で消去する必要があります。

- a) EM コンソールにあるイベント画面の「警告」タブで、発生したイベントを「履歴」タブに移動します。
- b) 「履歴」タブで、このイベント発生を削除します。

これらのステップによりイベントが消去され、このイベントのために警告として設定されていたグループ画面の赤い旗もリセット（緑に変わる）されます。

2. 重複イベント

Enterprise Manager 2.2 では、イベントが Intelligent Agent リリース 8.1.7 に対して登録されている場合は、重複イベントを発行できます。重複イベントとは、同じパラメータを使用する同じイベント・テストを持ち、同一ターゲットに登録されたイベントのことです。たとえば、警告しきい値が 80%、警戒しきい値が 60% の表領域満杯テストを、同じ USERS 表領域に対して複数回登録できるということです。ただし、同じイベント内にこれと同じイベント・テストを持つことはできません。したがって、この例の場合、重複する表領域満杯テストは、異なるイベントに属する必要があります。

重複イベントは、8.1.7 以前の Intelligent Agent では使用できません。特定のノード上で稼働している Intelligent Agent のバージョンを調べるには、EM コンソールのナビゲータ・ツリーでそのノードを右クリックし、「プロパティ」を選択します。

8.1.6 以前の Intelligent Agent で稼働している Enterprise Manager リリース 2.1 では、重複イベントは使用できません。

8.1.5 以前の Intelligent Agent で稼働している Enterprise Manager リリース 2.0.4 でも、重複イベントは使用できません。

3. 同義イベント・テスト

同義イベント・テストは、同じイベント内で同じ測定基準を監視するテストですが、使用するパラメータは異なります。たとえば、異なる表領域に登録されているが、同じイベントに属しているという 2 つの表領域満杯イベント・テストがそれに当たります。

同義イベント・テストは、Enterprise Manager 2.2 およびサポートされている全てのバージョンの Intelligent Agent でサポートされます。

4. Enterprise Manager 2.0.4 リポジトリからの同義イベントの移行

Enterprise Manager リリース 2.0.4 リポジトリから Enterprise Manager リリース 2.2 リポジトリへアップグレードする際、Enterprise Manager リリース 2.0.4 に同義イベント（同一だが使用するパラメータが異なるイベント・テストを複数持つイベント）がある場合、

リポジトリのアップグレード後に、リリース 2.2 コンソールを起動してから、これらの同義イベントの登録を解除し、再登録する必要があります。

5. ジョブ履歴またはイベント履歴をリフレッシュする際、リフレッシュする履歴の量が多いと、最初は画面に何も表示されません。この問題を解決するには、スクロール・バーの位置を調整してください。(Bug#819774)

6. Windows 2000 のノードでのジョブの実行

Windows 2000 のノード上でジョブを実行する際、ジョブは

「C:\winnt\temp¥21041345280.99が見つかりません」というエラーで失敗する可能性があります。Windows 2000 では異なるオペレーティング・システム・レベルのセキュリティを設定できるため、TEMP ディレクトリに対する権限が不十分なことから、このエラーが生じます。この問題が発生した場合は、どのユーザーも TEMP ディレクトリ内でファイルを作成、更新および削除できることを確認してください。TEMP ディレクトリは、TEMP 環境変数で表されるディレクトリです。また、TEMP 環境変数で示されるディレクトリにも、作成、更新および削除権限があることを確認してください。最後に、ジョブを再発行する必要があります。

7. Oracle Management Server 経由での、データベース起動はできません。DBA Studio をスタンドアロンで起動し、データベース起動を行ってください。(Bug 1377901)
8. ローカル管理の表領域作成では、デフォルトでエクステンツ管理に「ローカル管理」が選択されていますが、実際にローカル管理表領域を作成するには一度「ディクショナリ管理」を選んで再度「ローカル管理」を選んでください。ローカル管理の表領域を作成する場合は、SQL 表示ボタンを押し、生成された SQL 文に「EXTENTMANAGEMENT LOCAL」が含まれていることを確認してから実行・作成することを推奨します。(Bug#1478964)
9. マテリアライズド・ビュー作成ダイアログでジョブ発行ボタンを押した場合、エラーが発生し正しくジョブが発行されません。(Bug#1479075)
10. ジョブを使用して、Intelligent Agent リリース 8.1.6 が稼動している Windows NT ノード上のデータベースを停止する場合、データベースの停止状態に関わらず、完了ステータスが「失敗」で返ってきます。(Bug#1478931)
11. TCL ジョブの入力/出力データに日本語などのマルチバイト文字を伴う場合は、文字コード変換を行わないと、ジョブが正常に動作しない場合があります。必ず、「convertin」および「convertout」関数を用いて、明示的に文字コード変換を行ってください。

4.4 グループ

1. ナビゲータ・ツリーで「グループ」フォルダまたは特定のグループを選択した場合、ナビゲータのメイン・メニューで「グループ作成」を選択しても、何も起こりません。これを回避するには、「グループ」メイン・メニューの「グループ作成」メニュー項目を選択するか、または右クリックをして「作成」を選択します。(Bug#1283307)

2. グループ作成時、背景に画像ファイルを指定しても、スクロールバーが表示されない場合があります。OEM コンソールを再起動することで、正しくスクロールバーが表示されます。(Bug#1363847)

4.5 ポケットベルおよび電子メールのブラックアウト

1. ポケットベルと電子メールのブラックアウトを特定の曜日に設定し、指定した曜日の真夜中を超えるブラックアウトを行うことはできません。たとえば、水曜日の午後 11 時 30 分に開始して木曜日の午前 1 時 30 分まで続く 2 時間のブラックアウトは作成できません。これを行うには、水曜日の午後 11 時 30 分から午前 12 時と、木曜日の午前 12 時 1 分から午前 1 時 30 分という、2 つの別々のブラックアウトを作成する必要があります。(Bug#1036820)
2. 「間隔指定」で実行されるブラックアウトを定義する場合は、ブラックアウトの「有効期間」には終了日を設定しないでください。(たとえば、有効期間は、「開始: 07/30/00 終了: <指定しない>」のように指定します。) 終了日を指定すると、その期間の最終サイクルでブラックアウトが実行される問題が発生します。終了日を指定しないままにして、この問題を回避してください。(Bug#1367312)

4.6 DBA Management Pack

1. スキーマ名にデリミタとして"."が含まれていると、このスキーマの下にあるオブジェクトを表示する際に、詳細が空になります。(Bug#1055740)
2. サマリー・アドバイザー・ウィザードを使用するには、listener.ora ファイルおよび tnsnames.ora ファイルに外部プロシージャ・エージェントを設定する必要があります。詳細は、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。
3. OS 認証は、データベースに直接接続しているとき(クライアント/サーバー・モード)にのみ機能します。Management Server を介して接続しているときには、OS 認証はサポートされません。
4. SQL*Plus Worksheet の実行中に「SP2-0738 Restricted command」エラーが発生すると、SQL*Plus が OMS に接続する際、サーバー側のファイル・システムにアクセスできません。この場合、OMS マシン上でスクリプトの実行が試みられ、SQL*Plus プロセスが制限モードで実行されます。セキュリティ上の理由で、クライアント側のスクリプトのみが、「ローカル・スクリプトの実行...」メニューにより実行できます。詳細は、「SQL*Plus Worksheet ヘルプ」を参照してください。
5. レプリケーション(サーバー側)は、レプリケーション環境を定義するために、DBA Studio Replication Management オプションを使用する前にインストールする必要があります。レプリケーションがインストールされていないと、ウィザードで実行されるタスクはすべて失敗します。

6. LONG または LONG RAW データ型の列が含まれる索引構成表 (IOT) はパーティション化できないため、LONG または LONG RAW データ型の列が主キー列でない場合は、エラー・メッセージが正しく表示されなくなり、パーティションが入力可能になります。IOT に LONG または LONG RAW データ型の列が含まれ、それが主キーの場合は、「LONG/LONG RAW データ型列を持つ表はパーティション化できません」というエラー・メッセージが正しく表示されます。
7. データベース・レポートのスケジューリングは、ユーザーが SYSDBA としてログインし、そのユーザーのパスワードが NORMAL での接続時と SYSDBA での接続時で異なる場合は失敗します。これを回避するため、レポートのスケジューリングには NORMAL で接続してください。SYSDBA で接続すると、レポートのスケジューリングでは無視されますので、注意してください。(Bug#1360896)
8. レプリケーション・ウィザードは、DBA Studio からのみ起動できます。Enterprise Manager コンソールを使用する場合、まず DBA Studio を起動してからレプリケーション・ウィザードを起動してください。(Bug#1365244)
9. DBA Studio で格納された構成を編集するとき、マウスの右クリックにより出現したメニューで「編集」を選択し、さらに出現したダイアログで「OK」をクリックした場合、エラーが発生する場合があります。この場合、変更はセーブされていますので、「取消」を選択してダイアログを終了してください。(Bug#1377721)
10. SQL*Plus Worksheet を日本語環境でご使用の場合、
\$ORACLE_HOME¥sysman¥config¥dbappscfg.properties に次のパラメータを指定してください。

SQLPLUS_NLS_LANG= (お使いの環境に合わせた NLS_LANG 値)

SQLPLUS_SYSTEMROOT= (お使いの環境の %SystemRoot% 環境変数の値)

¥マークは、dbappscfg.properties 内に記述されている例に従い¥¥としてください。

<例>

SQLPLUS_NLS_LANG=Japanese_Japan.JA16SJIS

SQLPLUS_SYSTEMROOT=C:¥¥WINNT

11. DBA Studio のナビゲータ・ウィンドウの記憶域から表領域を選択して表示される、使用率を示す棒グラフを説明するポップアップ表示が正常に表示されません。「使用率 xx.xx%」と表示されるべき説明文が「xx.xx すべて%」と表示されます。

4.7 Oracle Management Server (OMS)

1. Windows での OMS サービスの作成

Windows NT および Windows 2000 では、サービスとしての OMS の作成は、Enterprise Manager Configuration Assistant(EMCA)によって実行されるようになりました。つまり、

OMS サービスは、インストール時に、新規リポジトリを作成または既存リポジトリを使用するために EMCA を使用した場合にのみ作成されます。

OMS サービスは「手動」起動タイプで作成されます。これは、構成が不適切または不十分な OMS の自動起動を防ぐために設計されました。OMS が適切に構成され、テストが行われると、OMS のサービス・タイプを必要に応じて「自動」に変更できます。次の手順で、これを実行できます。

- 1) 「コントロール パネル」の「サービス」オプションを起動します。
- 2) OMS サービス（「Oracle<Oracle ホーム名>ManagementServer」という名前）を選択します。
- 3) 「スタートアップ」ボタンをクリックし、適切な「スタートアップの種類」タイプのラジオ・ボタンを選択します。

2. 強化された OMS 起動

oemctrl ユーティリティを介して OMS を起動すると、OMS の起動時に進捗インジケータが表示されます。OMS が完全に起動した場合にのみ、OMS が起動したことを示すメッセージが表示されます。OMS の起動時に問題が生じた場合は、該当するエラーが発生します。oemctrl を使用して Windows NT または 2000 で OMS を起動し、起動が完了すると、「コントロール パネル」内の対応するサービスにも「開始」ステータスが反映されます。

Windows NT または 2000 上のサービスとして OMS を起動すると、OMS が完全に起動した後にのみ、ステータスが「開始」になります。

起動時に問題が発生した場合は、\$ORACLE_HOME/sysman/log ディレクトリにある oms.nohup ファイルを参照してください。

3. OMS の停止

Windows NT および 2000 上で、「コントロール パネル」からサービスとしての OMS を停止すると、停止を実行するための接続情報を尋ねるダイアログ・ボックスが表示されます。指定する接続情報は、有効な Oracle Enterprise Manager スーパーユーザー・アカウントです。

4. OMS のステータス

OMS のステータスを調べるには、新しい oemctrl オプション、oemctrl ping oms を使用できます。このオプションは OMS が使用可能かどうかを調べるのに適しています。接続情報は必要ありません。

5. Solaris から HP への接続

OMS が Solaris ノードで、EM リポジトリ・データベースが HP 10.20 ノードで稼働している場合は、次の SQLNET.ORA パラメータを OMS ノードで設定する必要があります。

```
DISABLE_OOB=ON
```

SQLNET.ORA ファイルは、\$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリにあります。
\$ORACLE_HOME は、OMS がインストールされているディレクトリです。このパラメータは、Sun と HP の TCP 層による同じソケットでの同時緊急メッセージの処理方法が異なるために生じる sqlnet 接続の停止を防ぎます。

このパラメータを設定した後、OMS を停止し、再起動する必要があります。

6. Oracle Management Server の状態表示

コマンドプロンプトで「oemctrl status oms <スーパー管理者名>/<パスワード>」コマンドを実行しても、VXA-2009 エラーが発生し状態表示が行えない場合があります。

4.8 Enterprise Manager Configuration Assistant

1. リリース 2.2 以前のリポジトリ

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 以前の既存リポジトリは、インストール時に自動的にアップグレードされません。リポジトリに対するアップグレードは、各種 Enterprise Manager 製品でそのリポジトリを使用する既存ユーザーに影響を与えます。リポジトリのユーザー全員が、コンソール、DBA Studio、Management Pack など、各自のソフトウェアをリリース 2.2 にアップグレードするまで、リポジトリのアップグレードは行わないでください。リポジトリのアップグレードに適した時期をスケジュールした後、EMCA を使用してアップグレードを実行します。

2. EMCA によるリポジトリのアップグレード

リポジトリのアップグレードを実行するには、明示的に Configuration Assistant (EMCA) を実行し、「アップグレード」オプションを選択する必要があります。「アップグレード」オプションを選択し、DBA 権限を持つアカウントを使用してログインすると、EMCA にはアップグレード可能な既存のリポジトリが表示されます。リポジトリがリストにならない場合は、EMCA によってアップグレードできないことを意味します。アップグレードするリポジトリを選択し、操作を続けます。

Windows NT または 2000 上で EMCA を実行中の場合は、EMCA のアップグレードにより、まだ作成されていない OMS サービスも作成されます。

4.9 Enterprise Manager Migration Assistant

- 一部のサービスについて、優先接続情報リストをリリース 1.x リポジトリからリリース 2.2 リポジトリに移行できない場合があります。この場合は、リリース 2.2 コンソールで、そのサービスの優先接続情報リストを手動で設定する必要があります。(Bug#751627)

4.10 ブラウザベースの Enterprise Manager

- ブラウザベースの Enterprise Manager にログインした後、コンソールが停止していることに気づいた場合は、(1) 使用している Web ブラウザでプロキシが設定されていないこ

と、および (2) 使用されている MSVCRT.DLL がバージョン 5.00.7303 より後のバージョンであることを確認してください。MSVCRT.DLL のバージョンは、システム・パスでこの dll を検索することにより調べられます。パスで見つかった最初の dll は、使用中のものではないことがときどきあります (この dll は c:\winnt40\system32 からロードされたものと考えられます)。使用中の dll を確認するには、コンソールの停止中にその dll の名前を変更してみてください (Windows NT エクスプローラでは、使用中の dll の名前を変更できません)。dll のバージョンは、プロパティを参照することで確認できます。dll を置換するには、次の手順で行います。

DOS シェルからの場合:

- 1) dll が存在するディレクトリにディレクトリを変更します。
 - 2) msvcrt.dll の名前を「_msvcrt.dll」に変更します。
 - 3) 正しいバージョンの msvcrt.dll を元のディレクトリにコピーします。
 - 4) マシンを再起動します。
- 2 Web サーバーに初めて接続すると、jar ファイルがダウンロードされます。ブラウザ・プロセスは、ダウンロード時に多くのメモリーを消費するように見える場合があります。ダウンロードが完了した後、ブラウザを終了し、EM コンソールを起動する前に再起動してください。
3. Enterprise Manager の起動ページから EM コンソール、DBA Studio または SQL Worksheet を起動すると、選択したアプレットを実行するために別のブラウザ・ウィンドウが作成されます。これにより、元のブラウザ・ウィンドウは別の目的に使用できます。
- この別のブラウザ・ウィンドウは閉じないでください。閉じると、アプレットも停止してしまいます。
4. 複数の言語をインストールして複数の言語を使用して Web ブラウザから Enterprise Manager を使用するには、以下の URL を使用してください。

`http://<マシン名>:3339/EmWebSite_xx.html` (xx は言語名、日本語は"ja")

もし一つの言語で使用する場合は、EmWebSite_xx.html を EmWebSite.html にコピーし、「`http://<マシン名>:3339/`」という URL を使用してください。

4.11 統合アプリケーション

4.11.1 Oracle *interMedia* Text Manager

1. Oracle *interMedia* Text Manager の起動時に現れるダイアログ・ボックスに無効なサービス名を入力すると、*interMedia* Text Manager の動作が停止する場合があります。
2. 「作成 オブジェクト」ダイアログを取り消すと、*interMedia* Text Manager が終了する場合があります。

3. *interMedia Text Manager* を用いて、INDEX_SET プリファレンスを作成することはできません。(Bug#1480444)
4. *interMedia Text Manager* を用いて、MULTI_STOPLIST を用いたテキスト索引の作成はできません。 MULTI_STOPLIST を用いてテキスト索引を作成する場合、コマンドラインから作成を行ってください。(Bug#1480463)
5. *interMedia Text Manager* から ConText Server を起動すると、正常に起動したか否かに関わらず「Job failed: Error Output from job xxx lost.」というメッセージが表示されます。OEM Console のジョブ履歴にも、ConText Server 起動ジョブが失敗のステータスで記録されます。(Bug#1587092)

4.11.2 Oracle Forms Server Manager

1. Forms リスナー・ログ・ファイル内の日本語文字は文字化けしています。(Bug#1286040)
2. 「Forms リスナーの作成」ダイアログ内で、「ソケット」モードは選択できません。(Bug#1370422)

4.11.3 Oracle Enterprise Security Manager

1. Enterprise Security Manager の起動時にダイアログ・ボックスが現れますが、このダイアログ・ボックスからヘルプを起動すると、ヘルプ・ダイアログは入力を全く受け付けない場合があります。この場合は、Enterprise Security Manager 本体の「ヘルプ」メニューからオンライン・ヘルプを起動してください。(Bug#1183164)

4.11.4 Oracle Parallel Server Manager

1. Parallel Server を含むノードをナビゲータから削除した場合、ナビゲータ内の表示が一部正常でなくなる場合があります。その場合、ナビゲータを一旦最上位まで縮小し、それからナビゲータを拡張してください。(Bug#1051444)
2. Parallel Server に対するデフォルト接続情報が設定されていない場合、Oracle Enterprise Manager はデータベースのデフォルト接続情報を使用し、Parallel Server インスタンスに接続を試みます。その場合は、その Parallel Server に対する優先接続情報、もしくは Parallel Server 一般のデフォルト接続情報を設定してください。(Bug#1051439)
3. Oracle Enterprise Manager 内に表示される Oracle Parallel Server のアイコンの表示が適切でない場合があります。(Bug#1106032 および 1106004)

4.12 その他

1. Enterprise Manager、または Enterprise Manager に統合されているアプリケーションが Windows 95 または Windows 98 で起動すると、そのアプリケーションと一緒に起動された DOS ウィンドウが現れます。DOS ウィンドウは閉じないでください。DOS ウィンドウ

ウを閉じると、起動されていた Enterprise Manager アプリケーションが終了してしまいます。(Bug#1161051)

2. JRE は、各種 Oracle 製品によりインストールされます。ただし、共有 JRE は 1 システムにつき 1 つに限られます。したがって、Enterprise Manager リリース 2.2 のインストール後に以前のリリースの Enterprise Manager (リリース 2.0 または 2.1) をインストールすると、リリース 2.2 の一部としてインストールされた JRE (Java Runtime Environment) が、自動的にダウングレードされ、エラー・メッセージは表示されません。JRE リリース 1.1.7.30o から JRE リリース 1.1.7.5o または 1.1.7.24o へのダウングレードは、Enterprise Manager リリース 2.2 の問題の原因となります。したがって、Enterprise Manager リリース 2.2 のインストール後に、Enterprise Manager リリース 2.0 または 2.1 をインストールしないでください。

8.1.7 以前の Oracle データベースをインストールしても、同様に JRE のダウングレードという問題が生じます。

この状態になった場合は、Enterprise Manager リリース 2.2 をインストールした CD-ROM (ほとんどの場合はリリース 8.1.7 CD-ROM) から JRE リリース 1.1.7.30o を再インストールすることにより、問題を回避できます。Oracle Universal Installer を再インストールして、JRE をインストールし直します。Installer は、JRE に依存しているためです。

3. Enterprise Manager の英語以外のバージョンでは、英語以外のオンライン・ヘルプで一部矛盾が生じる可能性があります。最新情報は日本語リリース・ノートを参照してください。

5. Oracle Change Management Pack

5.1 新機能

Oracle Change Management Pack リリース 2.2 には、次の機能が追加されました。

5.1.1 パフォーマンスの改善

次のような操作のパフォーマンスが大幅に改善されました。

- ベースラインの獲得
- 比較操作（コマンド行インタフェースの「比較」コマンド）

5.1.2 索引統計および表統計の比較

管理者は、索引統計および表統計の比較に、「データベース・オブジェクトの比較」アプリケーション（旧 DB Diff）の「統計の比較」機能を使用できます。「統計の比較」オプションを使用可能にすると、表および索引の統計が比較されます。「統計」プロパティ・ページに表示される表および索引の統計は、すべて比較に使用されます。表および索引の統計比較には、タイム・スタンプは含まれません。

5.1.3 コマンド行インタフェースのロギング機能

新規の「-l」オプションは、コマンドの獲得、比較、生成および実行のロギングを有効にする場合に使用します。ロギングを有効にすると、操作中に GUI で表示されるのと同じメッセージを DOS ウィンドウにも表示できます。デフォルトでは、操作の処理中、DOS ウィンドウにはメッセージが表示されません。

5.1.4 影響レポートとスクリプトのサマリー・フォーマットの向上

影響レポートとスクリプトのサマリーが読みやすくなりました。

5.2 警告および既知の問題

5.2.1 Oracle Change Management Pack 一般

1. 表領域を他のデータベースに伝播する際、Change Manager では表領域データファイルに指定したディレクトリの存在や、表領域のデータファイルがすでに別の表領域で使用されているかどうかを確認しません。ディレクトリが存在しない場合、スクリプトは失敗します。指定したデータファイルが、宛先のデータベースを含め、別のデータベースですでに使用されている場合、スクリプトによりデータベースが破損する可能性があります。表領域の伝播には、細心の注意を払ってください。表領域エグザンプラではデータファイル指定を変更できません。（Bug#630628 および 643516）

2. Oracle 8i で使用可能な「列の削除」操作は、ディレクティブ作成時には無効となります。表ディレクティブ編集の際、表の列のポップアップ・メニューには「列の削除」および「削除」エントリの両方が含まれます。「削除」のみ有効です。表を削除および再作成して列を削除する Oracle Change Manager の操作では、「列の削除」操作と混同されないように、列を非表示にし、後のクリーンアップ用にマーク付けします。(Bug#1140157)
3. オブジェクト名が 0 または 1 で始まる場合、オブジェクトのディレクティブは有効範囲付ディレクティブとして作成され、有効範囲指定では先頭の文字を除いたオブジェクト名が示されます。これは、スクリプト生成中、変換エラーとして表示されません。この変更に対してスクリプト・ステップが生成されなかったことを見逃す可能性もあります。次善策としては、不適切な名前を削除し、先頭の文字を含めた適切な名前を追加して、有効範囲指定を編集します。(Bug#1354935)
4. 数千のエントリのある履歴では、履歴ダイアログ・ボックスの起動にかなりの時間がかかる場合があります。履歴レコードを取得する問合せパフォーマンスを向上させるために、リポジトリ・スキーマの VBZ\$HISTORY 表で、object_type、object_owner および object_name に索引を追加できます。(Bug#1274702)

5.2.2 スクリプトの生成および実行

1. Oracle7 Server から Oracle8 Server にスナップショットを伝播すると、結果スクリプトでは、ROWID スナップショット (V7 スナップショットで唯一有効なタイプ) ではなく主キー・スナップショット (V8 スナップショットのデフォルト) の生成を試行します。スナップショット・マスター表に主キーが存在しない場合、リフレッシュ・メソッドが予期せず変更されるばかりでなく、伝播も失敗します。(Bug#790579)
2. データベースで、あるスキーマから別のスキーマにリフレッシュ・グループを伝播すると、スナップショットは、宛先のリフレッシュ・グループに挿入されると同時にソースのリフレッシュ・グループから削除されます。スナップショットは最大 1 つのリフレッシュ・グループに限り存在可能なため、これは適切な動作です。ただし、この動作が予想外である場合も考えられますが、警告は発行されません。このような状況を避けるには、場合に応じてリフレッシュ・グループとともにスナップショットを伝播してください。(Bug#790574)
3. スクリプトを生成し、スクリプト・オプション (マッピングまたは一時表領域など) を変更してスクリプトを実行すると、アプリケーションではスクリプトの再生成を求めません。これは、要求したスクリプト・オプションの変更が無効であることを意識せずにスクリプトを実行できることを意味します。スクリプト・オプションの変更後は、必ずスクリプトを再生成してください。(Bug#685123)
4. RECOVERABLE キーワードが指定されている場合、スクリプトの生成では ARCHIVELOG モードを確認しません。宛先が ARCHIVELOG モードの場合、生成ではエラーはレポートされませんが、スクリプトは失敗します。問題を修正するには、ARCHIVELOG モードをオンにするか (使用可能な場合)、スクリプトを編集して RECOVERABLE キーワードを削除してください。(Bug#789258)

5. スクリプト実行時に、宛先データベースが破損するか、ユーザーが誤ったタイミングで実行を中断した場合、Change Manager では最後に完了したステップを追跡できないことがあります。この場合、実行を元に戻そうとしても最後に完了したステップから開始されません。このような問題が発生した場合は、次の手順を実行して問題を修正します。

- スクリプトを編集し、"set SCRIPTID nnnnnnnn"の行から数字をコピーして、スクリプト ID を取得します。
- 宛先データベースのスクリプトを実行するユーザー（宛先の優先接続情報リストにあるユーザー）のスキーマで、VBZ\$JOB_TABLE_SID 表を検索し、script_id が前述の手順で取得したスクリプト ID と一致する行を確認します。
- 順方向に実行して問題が発生した場合、last_step の値を 1 ずつ減らしてください。逆方向に実行して（UNDO）問題が発生した場合、last_step の値を 1 ずつ増やしてください。その後、変更をコミットしてください。これにより、スクリプトの実行または UNDO を続行できるようになります。

（ Bug#782142 ）

6. クラスタ・オブジェクトを削除して再作成する操作では、結果としてスクリプトが正しく実行されない場合があります。通常は、このような操作は避けた方が無難ですが、ORA-955 エラーなどの場合はスクリプトの実行を続けることも可能です。

（ Bug#1246254 ）

7. 生成済 TCL スクリプトの NLS 問題で失敗しないように、データベース・ログイン接続情報では ASCII 文字のみを使用するようにしてください。（ Bug#1320961 ）
8. ALTER 文を使用して再作成したスキーマ・オブジェクトは、スクラッチ表領域がローカルで管理されている場合、オブジェクトを元の表領域に移動すると、オブジェクトの NEXT_EXTENT パラメータが保存されない場合があります。（ Bug#1094357 ）

5.2.3 Plan Editor

1. Plan Editor で長いスクリプトを実行し、「実行」ページをいったん終了してから再度戻ると、スクリプトが終了するまでスクリプトの実行経過は表示されず、実行制御ボタンの状態も正しくありません。（ Bug#687631 ）

5.2.4 データベース・オブジェクトの比較

1. 名前の異なる 2 ユーザーの特性を比較するには、スキーマ・マップを使用してこの 2 ユーザーを一致させます。このためには、比較するスキーマ・オブジェクト・タイプを少なくとも 1 つ指定し、フィルタをかけて比較からスキーマをすべて除外します。これにより、ユーザーに加えてスキーマ・オブジェクトが比較されるのを防ぎます。
2. 32KB よりも大きい PL/SQL オブジェクトを含む差異が検出された場合、比較は保存されません。（ Bug#1337177 ）

3. 相互比較中にスキーマをマップすると、対応するユーザーは表示されないことがあります。比較が保存された後復元される場合には、この問題は出現しません。(Bug#1334680)

5.2.5 ベースラインの作成

1. Create Baseline アプリケーションで「SQL を生成」を指定し、ベースラインを後で獲得するように指定した場合、ベースラインを獲得する際に SQL は生成されません。SQL は、ベースライン獲得後に Baseline Viewer で生成できます。(Bug#1041775)
2. バージョン 7.3.4 の Oracle データベースでは、キャラクタ・セットが ASCII とは異なるため、ベースラインを獲得できません。ORA-01026 エラーが発生して獲得に失敗します。(Bug#1171762)

5.2.6 コマンド行インタフェース (CLI)

1. Windows95/98 では、CLI コマンドを実行する DOS ウィンドウで環境変数領域を拡大する必要があります。DOS ウィンドウからプロパティ・ページを起動し、メモリーのタブで初期環境値を増やします。(Bug#1154171)
2. Windows95/98 では、Oracle ホームへのパス名または OMS ログイン接続情報が長すぎる場合、コマンド行インタフェースが動作しない場合があります。クラスが見つからない旨を知らせるエラーが発生したり、正しいコマンドを入力したにも関わらず予想外の使用であると示される場合には、この問題が発生する可能性があります。(Bug#1219008)

5.2.7 現在サポートされていないデータベース機能および属性

注意: 『Oracle Enterprise Manager Oracle Change Management Pack スタート・ガイド』の「Oracle Change Management Pack アプリケーションがサポートするデータベース・オブジェクト」の項では、このリリースの Oracle Change Management Pack でサポートされるデータベース・オブジェクトの一覧を示しています。ここに記載している機能を除き、一覧にあるデータベース・オブジェクト・タイプの機能はすべてサポートされています。ここでは、次の事項について記載します。

- サポートされていないデータベース機能
- 一部サポートされているデータベース属性
- サポートされていないデータベース属性

今後のリリースでは、これらの Oracle 機能および属性がサポートされる予定です。

5.2.7.1 サポートされていないデータベース機能

現在サポートされていないデータベース機能は次のとおりです。

- オブジェクト指向機能

オブジェクト表

ネストされた表

表の索引

オブジェクト・ビュー

- 読取り専用でないスナップショット
- (ユーザーおよびロールに属する)消費グループ
- ハッシュ・パーティションおよびサブパーティション
- 計画を削除して既存の表を作成する際の、LOB 列を含むパーティション表
- FLOAT データ型 (ただし、このデータ型に相当する NUMBER(n,n)はサポートされています)。

注意: サポートされていない機能を持つオブジェクトを参照する変更計画を作成する場合、スクリプトの生成時に診断メッセージが表示され、サポートされていない機能について警告します。

- 次のような場合、サポートされていない機能を持つオブジェクトが計画に含まれる可能性があります。
 - サポートされていない機能を持つオブジェクトのエグザンプラを作成する場合
 - サポートされていない機能を持つオブジェクトを削除および/または作成する操作を要求する (オブジェクト表を含むスキーマの名前変更を要求するなど) 場合
 - サポートされていない機能を持つオブジェクトに対するディレクティブを作成する場合、またはオブジェクトにサポートされない機能を持たせるような変更を試行する場合
- 「ベースラインの作成」および「データベース・オブジェクトの比較」アプリケーションでは、オブジェクトを獲得して比較しますが、ネストされた表など、サポートされていない機能の属性のいくつかは無視されます。

5.2.7.2 一部サポートされているデータベース機能

- 属性に対するディレクティブは作成できませんが、サポートされている属性がいくつかあります。「ベースラインの作成」および「データベース・オブジェクトの比較」アプリケーションでこれらの属性を獲得および比較し、エグザンプラを使用してどこか別の場所に属性を複製できます。ただし、ディレクティブを使用して属性を変更することはできません。
- 一部サポートされているデータベース属性
 - 索引キー圧縮: 獲得および複製可能だが、Compare Database Objects アプリケーションでは差異は検出されず、ディレクティブを使用した設定変更は不可

- 列レベルの権限（表内のある 1 列に SELECT 権限を賦与するなど）
- 表制約: [NOT] DEFERRABLE EXCEPTIONS INTO <表>

5.2.7.3 サポートされていないデータベース属性

データベース属性の一部は、このリリースの Oracle Change Management Pack でサポートされていません。

- これらの属性は「ベースラインの作成」アプリケーションで獲得されません。
- 「データベース・オブジェクトの比較」アプリケーションでは、これらの属性を含むオブジェクト間の差異を検出しません。
- これらの属性を含むオブジェクトの複製の際、新規オブジェクトにはこれらの属性が含まれません。
- これらの属性を含むオブジェクトの削除および再作成（表の列の削除など）の際、オブジェクトが適切に再作成されません。

サポートされていないデータベース属性は次のとおりです。

- データベース・リンク:
 - SHARED
 - AUTHENTICATED BY
- STORAGE 句
 - BUFFER_POOL
- CREATE SNAPSHOT 文
 - CLUSTER 句
 - 表のパーティション化情報
- CREATE SNAPSHOT LOG 文
 - 表のパーティション化情報
- NOLOGGING 属性:
 - スナップショット・ログ

6. Oracle Diagnostics Pack

6.1 新機能

Oracle Diagnostics Pack リリース 2.2 には、次の機能が追加されました。

- データベース・パフォーマンスの状態が一目でわかる、新しいデータベース状態概要による、リアルタイム・パフォーマンス監視およびトラブルシューティング機能の向上。
- Tuning Pack SQL Analyze アプリケーションのコンテキストごとの診断実行による、SQL チューニングのさらなる統合の実現。
- Web サーバー診断の拡張。 サービス検出、リアルタイム・パフォーマンス監視、イベント・テストおよびサーバー使用に関するレポートなどの Apache Web サーバー監視レポートの追加。
- Solaris、HP-UX および NT オペレーティング・システムの新規イベント・テストの追加。
- 診断レポートの拡張。

6.2 警告および既知の問題

6.2.1 Performance Manager

1. グラフのウィンドウがグラフ表示に十分な大きさでない場合、グラフには凡例のみ表示されます。 データを表示するには、ウィンドウのサイズを変更してください。
2. Windows NT のホストのディスク統計を収集するには、Performance Manager または Capacity Planner を使用する前に、Windows NT でディスク統計収集を有効にする必要があります。 このためには、監視対象ホストで次のコマンドを入力します。

```
diskperf -Y
```

これで、次回システムを再起動すると、ディスク統計が有効になります。

3. ユーザー定義グラフでは、他のグラフへのドリルダウンをサポートしていません。
4. グラフを表示および取り消すごとにメモリー・リークが発生するため、ツールを再起動し、モニターで使用しているメモリーを解放する必要があります。(Bug#682636)
5. 類似作成機能を使用してユーザー定義グラフをあるデータベースから別のデータベースにコピーする場合、問合せで select * を使用し、ターゲット・データベースの列数が異なると、未処理の `ArrayIndexOutOfBoundsException` が発生します。(Bug#784409)
6. グラフ名にアポストロフィが含まれていると、そのグラフは表示できません。(Bug#681800)

7. ロック・グラフからセッションを削除する場合、確認ダイアログは表示されず、ただちにセッションは削除されます。
8. 「リフレッシュ時間の設定」画面の「ヘルプ」ボタンからヘルプを表示すると、ヘルプ画面は表示されますが、文章が表示されません。この場合、Performance Manager のメイン画面のヘルプ、または、各統計グラフ表示画面のヘルプから「リフレッシュ時間の設定」の項のヘルプを選択して参照してください。
9. Performance Manager の起動直後、ユーザー定義グラフの設定入力ができない場合があります。この場合、一旦 Performance Manager の画面の外にカーソルを移動させマウスをクリックした後に、再度 Performance Manager の画面に戻りユーザー定義グラフの設定を行ってください。
10. グラフのタイプを「折れ線グラフ」に指定して、統計情報を時系列に画面に出力している最中にグラフの項目を削除した場合、グラフの項目は削除されますが、変更時点までに既に画面に表示されたグラフは削除されません。この場合、一旦異なるグラフタイプを指定してグラフを表示させた後に、再度折れ線グラフを指定してグラフを表示させてください。

6.2.2 Capacity Planner

1. Intelligent Agent をリリース 8.1.7 にアップグレードすると、Capacity Planner 旧リリースで追加したユーザー定義のクラスは無効になります。これらのユーザー定義クラスの定義を再入力し、収集を再起動する必要があります。
2. 表に含めることが可能なデータ・セット（行）の最大数は 50 です。1 回の分析で 50 より多いデータ・セットは表示できません。これには、選択ソース/項目およびその外挿適合も含まれます。
3. Capacity Planner ユーザーは、オプションでデータ収集およびロード間隔を設定できます。傾向分析など長期間の操作（Performance Manager のリアルタイム監視モデルと対照的）をサポートするために Capacity Planner データを収集中の場合、頻繁な収集およびロードは必要ないと考えられます。これらの間隔に高い頻度（10 秒ごとのサンプル収集、60 秒ごとのデータ・ロード）を設定すると、Agent Data Gatherer に負荷がかかる場合があります。
4. 現在、分析グラフを表示するごとにメモリー・リークが発生します。1 回のセッションで多数の分析を表示する場合は、Capacity Planner を時折再起動する必要があります。（Bug#682384）
5. ロード中に、分析データの自動リフレッシュは行われません。Capacity Planner データ・リポジトリに接続し、ロードを実行すると、ナビゲータからはデータの自動リフレッシュを使用できません。ビューをリフレッシュするには、Capacity Planner データ・リポジトリを切断した後、再接続する必要があります。
6. 実行時に追加されたサービスは保存されません。実行時にナビゲータに追加されたサービスは、セッション中に限りナビゲータに表示されます。今後のセッションでサービス

を使用可能にするには、コンソールからサービスを Oracle Enterprise Manager 検出キャッシュに追加します。

7. Capacity Planner の分析における行の削除およびポイントの除外は、分析の一部としては保存されません。
8. ターゲットへの接続およびターゲットからの切断時にメモリー・リークが発生します。1 回のセッションで多数の接続が作成される場合は、Capacity Planner を時折終了して再起動する必要があります。（Bug#788116）
9. 事前定義分析では、1 時間ごとのデータを 1 か月分というデフォルトの日付選択は変更できません。
10. グラフに複数のデータ・ソースが含まれている場合、あるデータ・ソースの行を削除すると、グラフに含まれている他のすべてのデータ・ソースから、このデータ項目の行が削除されます。
11. Capacity Planner には、収集モードおよび分析モードの 2 つのモードがあります。Capacity Planner の分析モードでグラフを作成または表示する場合、グラフ項目の説明は使用できません。説明は Agent Data Gatherer によって取得されますが、分析モードでは Agent Data Gatherer への接続が行われていないことが原因です。
12. 最初に Capacity Planning データ・リポジトリを新しいバージョンの Data Gatherer で作成した場合、以前のバージョンの Data Gatherer ではこのリポジトリにデータを保存できません。ただし、リポジトリを以前の Data Gatherer で作成した場合は、以降のいずれのバージョンの Data Gatherer でもこのリポジトリにデータを保存することが可能です。
13. Capacity Planner の起動直後、収集オプションの設定入力ができない場合があります。この場合、一旦 Capacity Planner の画面の外にマウスのカーソルを移動させクリックした後に、再度 Capacity Planner の画面に戻り、収集オプションの設定を行ってください。
14. Capacity Planner の起動時、Oracle Management Server への接続中エラーが発生した場合、エラーメッセージが正常に表示されない場合があります。

6.2.3 Oracle Trace Manager

1. Oracle 7.3.3 サーバーのデータ収集に Oracle Trace Manager アプリケーションを使用するには、7.3.3 Oracle ホームにある Oracle Tcl ジョブ・スクリプトを置き換える必要があります。この構成で Oracle Trace Manager を使用するには、オラクル社カスタム・サポート・センターに連絡し、\$ORACLE_HOME/network/agent/jobs/oracle/otrace/general にあるスクリプトと置き換える Oracle Trace Tcl ジョブ・スクリプトのアップデート版のセットを入手してください。
2. Oracle Trace Manager を使用して Oracle8 または Oracle 8i の Oracle ホームで製品を検出する場合、Oracle8 Server リリース 8.0.3（およびそれ以降）サーバーのリリースに対する SQL*Net 製品定義ファイル（収集対象を記述したファイル）が削除済であることに注意

してください。これにより、Oracle Trace Manager では Oracle8 以降のリリースに対する SQL*Net 製品を検出しません。

3. フォーマット・データベースのドロップダウン・リストで、データベースが<ホスト名>:<ポート名>:<SID>の形式で表示される（また、データベースが 8.1.6 以上でない）場合、データベースを Enterprise Manager コンソールで検出します。これにより、データベースはその標準サービス名で検出されます。
4. Oracle8i Server リリース 8.1.6 に対する収集で、Connect_Disconnect、CACHEIO、SQL_Text_Only、SUMMARY、Wait_Events のいずれかのイベントのデータを収集し、このデータを SQL_Txns_and_Stats、ALL、DEFAULT、EXPERT、SQL_and_Wait_Stats、SQL_Stats_and_Plan イベントのいずれのデータも含まないスキーマにフォーマットしようとする、フォーマットは見かけ上失敗して Trace Manager ではエラー・ダイアログが表示されます。ただし、フォーマットは処理後のステップでのみ失敗しています。このため、次善策としては Trace Data Viewer をスタンドアロン・モードで起動してフォーマット済スキーマに接続します。Trace Data Viewer では、フォーマットの処理後のステップを適切に完了します。
5. Oracle Trace は、「スタート」メニューではなくコンソールから起動してください。Trace をコンソールから起動しない場合、マルチバイト・キャラクタの問題またはアプリケーション・エラーなどの致命的なエラーが発生する可能性があります。
6. Oracle Trace 収集は、同じバージョンのデータベースにフォーマットする必要があります。たとえば、Oracle 8.1.7 の Trace 収集は、Oracle 8.1.7 データベース・スキーマにフォーマットします。（Bug#1349207）
7. Oracle8i Server リリース 8.1.7 から収集し、Oracle Trace Data Viewer 2.x で表示したフォーマット済データは Oracle Trace Manager で削除できません。必要であれば、フォーマット・データベースへの接続中に次の SQL を使用してフォーマット済収集を削除できます。

```
delete from epc_collection where collection_id = <coll_id>
```

（Bug#1361074）
8. Intelligent Agent リリース 8.1.7 を実行して UNIX ノードの Oracle Trace Manager 検出を行う際、Agent ノードに監視対象の Oracle 8.1.5 ホームが存在すると検出は失敗します。この問題は、Oracle Trace TCL スクリプトを変更することで修正できます。必要であれば、これらの変更に関する情報はオラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。（Bug#1349161）
9. ノードの検出中にエラーが発生した場合、Oracle Trace 検出ウィンドウの状態列の文字が正常に表示されない場合があります。
10. Trace Manager のメイン画面の「ヘルプ」アイコンを選択すると、エラーが発生して、ヘルプが正常に表示されません。この場合、Trace Manager のメイン画面のメニュー・バーの「ヘルプ」メニューからヘルプを参照してください。

11. Trace Manager のメイン画面の「ヘルプ」メニューから「キーワード検索」を選択した場合、ヘルプが英語で表示されます。この場合、Trace Manager のメイン画面のメニューバーのヘルプの「目次」から「トピック」を選択し、キーワード検索を行なってください。

6.2.4 Oracle Trace Data Viewer

1. 前述のとおり、Oracle8 または Oracle 8i データベースの Oracle Trace データを収集および表示するには、init<SID>.ora の ORACLE_TRACE_ENABLE パラメータの値を TRUE に設定します。
2. WAIT イベント時間統計を Oracle Trace Data Viewer で収集して表示するには、インスタンスで timed_statistics パラメータを有効にする必要があります。これは動的パラメータで、インスタンスを再起動することなく DBA Studio から有効化できます。
3. Oracle Trace Data Viewer ユーザーには、表、索引、ストアド・プロシージャおよびファンクションを作成するデータベース権限が必要です。
4. SUN OS データベースの Oracle Server リリース 7.3.3 の収集では、CPU 統計が示されない場合があります。
5. リリース 2.0.4 については、Trace Data Viewer で『Oracle Enterprise Manager Oracle Trace ユーザーズ・ガイド』の付録 C に示している権限の他に SELECT_ANY_TABLE SYSTEM 権限が必要です。
6. 同一システム上の異なるホームに Trace Data Viewer リリース 1.x および 2.x の両方のバージョンをインストールしてある場合、同一スキーマに 1.x および 2.x の両方のリポジトリを作成することはできません。2.x リポジトリ・スキーマに 1.x リポジトリを作成しようとすると、エラーが発生します。
7. 通常、無効な統計は、負の値あるいはランダムな非常に大きな値により検出可能です。無効な統計でソートを行うデータ・ビューを使用すると、不適切な結果となります。表示している統計が正しくないと思われる場合は、有効な統計でソートする他のデータ・ビューを選択するか、選択したデータ・ビューを有効な統計で表示およびソートするように変更します。
8. Oracle Trace バイナリ・データファイルに収集された Oracle8 Server リリース 8.0.5 の CPU 統計は有効です。値は、Trace フォーマット中に破損します。有効な CPU 値は、Oracle Trace の統計レポート作成ユーティリティで参照できます。レポート作成ユーティリティのオプションおよび情報については、『Oracle Enterprise Manager Oracle Trace ユーザーズ・ガイド』の付録 A を参照してください。8.0.4 フォーマットを 8.0.5 フォーマットで置き換える（ターゲット・データベースの \$ORACLE_HOME\bin\otrcfmt.exe）と、問題を修正できます。
9. CPU（ユーザー・モードおよびシステム・モードの CPU 統計）、Input_IO、Output_IO、Pagefaults、Pagefault_IO、Max_resident_set_size などのリソース使用率統計値は、NT プラットフォームでは初期化されず、Oracle8 Server リリース 8.0.5 に対する設定が行われません。このため、これらはランダムな値となります。無効なリソース使用率統計（CPU 消

費)でソートを行う Data Viewer のデータ・ビューを使用すると、不適切な結果となります。データ・ビューは、他の統計で表示および/またはソートするように変更できます。変更したデータ・ビューは、「カスタム」データ・ビュー・フォルダに保存されます。

- レコードが、収集のフォーマット済データの EPC_FACILITY_REGISTRATION 表に書き込まれない場合、ユーザーには次のようなエラーが表示されることがあります。Oracle Server リリース 8.0.4 データベースに対する収集の「ユーザーによるフィルタ」オプションを削除すると、今後の収集ではこの問題が修正されます。

XP-21016: データベース・エラーが発生しました。:

```
SELECT DISTINCT FACILITY_NUMBER, FACILITY_VERSION, VENDOR  
FROM EPC_FACILITY_REGISTRATION WHERE COLLECTION_ID - :1
```

ORA-00942: 表またはビューが存在しません

- 収集に手動で EPC_FACILITY_REGISTRATION レコードを追加する方法に関する情報は、『Oracle Enterprise Manager Oracle Trace ユーザーズ・ガイド』内の付録 C「トラブルシューティング・ガイド」を参照してください。詳細は、表またはビューが存在しない(あるいは収集にデータが存在しない)場合に関する項目の下の Trace Data Viewer の項目に記載されています。
- Trace Manager でフォーマット済データを表示する際、「XP-21162: データベース接続の試行に失敗しました、ORA-12154: TNS はサービス名を解決できませんでした」エラーが発生した場合、Enterprise Manager コンソールで「システム」メニューから「tnsnames.ora へのサービスの追加」を選択してください。Enterprise Manager の旧バージョンでは、ノード検出で tnsnames.ora ファイル名を自動的に更新しました。ここでは、このコマンドを選択して手動でファイルを更新する必要があります。
- ストアド・プロシージャから実行した SQL 文は、Trace Data Viewer では表示できません。文は収集に入れられますが、「ユーザーSYS で実行される SQL を除外」チェックボックスのチェックを外す必要があります。このバグは Oracle Server 8.1+データベースの収集では修正されました。
- Data Viewer で提供される Oracle Forms のデータ・ビューは、ベータと見なされて変換されません。
- Oracle Trace Manager の SQL_text_only イベント・セットでは、SQL 文テキストを収集しません。SQL 文テキストを収集するには、SQL_and_Stats、Default、または他の統計とともに問合せテキストを収集するその他のイベント・セットを選択します。

6.2.5 Oracle Advanced Events

- Intelligent Agent リリース 8.1.7 では、次のオペレーティング・システム(SUN Solaris、IBM AIX、HP-UX、Tru64 および Microsoft NT)の監視について新規イベントを提供しています。Enterprise Manager リリース 2.2 コンソールでノード・イベントを作成すると、OS タイプのドロップダウン・リストが表示されます。OS タイプの選択は、ノードで

Intelligent Agent リリース 8.1.7 を実行中の場合に限り可能です。それ以外の場合は、オペレーティング・システムのドロップダウン・リストから「すべて」を選択してください。この場合にリストでオペレーティング・システムの 1 つを選択すると、「使用可能な宛先」リストが非表示になるので注意してください。「すべて」のカテゴリを選択すると、サービスのリストが再表示されます。ターゲット・ノード上の Intelligent Agent リリース 8.1.7 をアップグレードすると、この問題は解消し、プラットフォームの多くのオペレーティング・システム・イベントにアクセスできます。

2. 自動的には消去されない拡張イベントには、データベース警告、データ・ブロック破壊、セッション終了、アーカイバの停止、Data Gatherer 警告の 5 つがあります。これらのイベントのいずれかが発生して手動で解決された場合、状況が解決されたことを自動的に検出する方法がないため、イベントは自動的には消去されません。よって、イベント発生の原因となった問題を解決した後は、次のようにイベントを手動で消去する必要があります。
 - Enterprise Manager コンソール内のイベント・ペインの「警告」タブで、発生したイベントを「履歴」タブへ移動します。
 - 「履歴」タブで、このイベント発生を削除します。
 - これらのステップによりイベントが消去され、グループ画面内でイベントによって警告状態となった赤のフラグをリセット（緑に変わる）します。
3. SysStat イベント、SysStat Delta イベントおよびユーザー定義 SQL イベントでは、時折、警戒フラグと「整数値が大きすぎて表示できません」という出力メッセージが発生する場合があります。これは、これらのイベントをチェックする統計のうち、符号付き整数で表現可能な範囲よりも大きい値を持つものがあるためです。（Bug#637664）
4. スワップ・イベントでは、スワップ・インとスワップ・アウトを区別しません。ページング・イベントでは、スワップ・インおよびスワップ・アウトの累積的な合計値を監視します。2 つの値の区別はしません。（Bug#739646）
5. ディスク満杯およびディスク満杯（％）イベントでは、ワイルドカードまたは>1 のパスを受け入れません。ユーザーは、ディスク満杯およびディスク満杯（％）イベントのパラメータとして、ノード上のすべてのディスクを表すために「*」を入力することはできません。これは拡張要求です。（Bug#752982）
6. Solaris、AIX、Compaq Tru64 または HP UNIX 上のディスクを監視し、これらのノード上で 8.1.7 以上の Intelligent Agent を実行している場合、「ファイル・システム」フォルダの下オペレーティング・システム固有の新規イベントにより、複数のディスクを示す空白区切りのリストまたはすべてのディスクを示す「*」を入力することが可能です。
7. Windows NT では、「論理ディスク」フォルダの下ノード・イベントである空き領域％、空きメガバイトを使用できません。これらのイベントに関するヘルプ・システムおよびドキュメントの情報は、無視してください。（Bug#1350889）

8. 拡張イベントの中には、データベース内のセグメント、データファイル、表領域およびエクステントの数に影響を受けるものもあります。このようなイベントとしては、小容量、セグメントの高速拡張、最大エクステント、複数エクステント、表領域満杯、連鎖行、索引再作成があります。これらのイベントでは、登録するイベントで参照するオブジェクト数を削減することをお勧めします。最大エクステント・イベントを例にとると、デフォルトの「*」（すべてのセグメント）を使用せず、監視の必要のある最も重要なセグメントを対象とするようにこのイベントを制限します。
9. リリース 8.1.7 以前の Intelligent Agent を使用する場合、最大エクステント・イベントを 5 つのオブジェクトに対して登録するというように、複数のオブジェクトに対してイベントを登録すると、このオブジェクトのいずれかがイベントのしきい値を超えた時点でイベントが発生します。ただし、続いて別のオブジェクトがイベントのしきい値を超えた場合、イベントは再度発生しません。この問題は、リリース 8.1.7 以降の Intelligent Agent に対してイベントを登録する際には発生しません。（Bug#738833）
10. Windows NT では、「物理ディスク」フォルダの下ノード・イベント・テストである平均ディスク・キュー長、平均ディスク読み込みキュー長、平均ディスク書き込みキュー長を使用できません。これらのイベントに関するヘルプ・システムおよびドキュメントの情報は、無視してください。（Bug#1355912）
11. Solaris、AIX および Compaq Tru64 では、「プロセス」フォルダの下ノード・システム時間、ユーザー時間という 2 つのイベント・テストのしきい値は、Enterprise Manager コンソールで表示される秒単位の時間ではなく、パーセンテージで計測されます。これにより、次のようになります。
 - システム時間では、指定プロセスで使用するシステム時間の割合が、指定した警戒または警告しきい値以上で、発生数が指定値を超えた場合、警戒または警告が発生します。
 - ユーザー時間では、指定プロセスで使用するユーザー時間の割合が、指定した警戒または警告しきい値以上で、発生数が指定値を超えた場合、警戒または警告が発生します。（Bug#1358645）
12. Windows NT では、NT のパフォーマンス・モニターでネットワーク・インタフェースというオブジェクトを参照できない場合、「ネットワーク・インタフェース」フォルダの下にイベントを登録しようとすると、スクリプト失敗のエラーが表示されることがあります。
13. NT 上のディスク統計を監視する（「物理ディスク」フォルダの下ノード・イベント・テストなど）には、「DISKPERF -Y」を実行してマシンを再起動する必要があります。
14. Windows 2000 でのネットワーク・インタフェースおよび物理ディスク・イベントについて、Windows 2000 では、ネットワーク・インタフェース・クラスおよび物理ディスク・クラス・ノード・イベントは、Agent のパッチなしでは適切に動作しません。パッチに

についてはオラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。
(Bug#1379645)

15. Windows NT および Windows 2000 間のパフォーマンス・レジストリ測定基準の違いにより、次の(「システム」フォルダの下の) O/S ノード・イベントは、Windows 2000 では動作しません。(Bug#1380614)

合計プロセッサ時間%

合計ユーザー時間%

合計権限時間%

合計割込み/秒

合計 DPC 時間%

合計割込み時間%

合計 DPC キュー/秒

合計 DPC 率

合計 DPC バイパス/秒

合計 APC バイパス/秒

Windows 2000 ノードに対してこれらのイベントを登録すると、その他の Windows 固有のノード・イベントが適切に動作しません。この問題を修正するには、前述のイベント・テストを含むイベントをすべて登録解除し、Windows 2000 ノード上の Agent を停止して再起動する必要があります。後者の問題発生を避けるための Windows 2000 上の 8.1.7 Agent に対するパッチ (Patch #1380614) があります。

パッチ適用後、前述のイベントを登録しようとする、「このイベントはこのターゲットには使用できません。もう一度登録してください。」というエラーが発生します。

ただし、他の Windows 固有のノード・イベントは影響を受けないため、Agent の停止と再起動は必要ありません。

6.2.6 Oracle TopSessions

1. TopSessions の自動リフレッシュ間隔が、実際にリフレッシュにかかる時間よりも短い場合、TopSessions では連続ループ内でスラッシングが発生します。ループを中断するには、ツールバーで「リフレッシュ・モード」ボタンをクリックして、手動リフレッシュ・モードに切り替えます。
2. TopSessions の自動リフレッシュで、長期間 (数時間) にわたり、極端に短いリフレッシュ間隔 (20 秒未満) を指定しないでください。システム・リソース使用率が過剰になります。

3. TopSessions のログイン画面で、「ヘルプ」ボタンまたは F1 キーをクリックしてヘルプを起動させた場合、エラーが発生してヘルプが正常に表示されません。

6.2.7 E-Business Management Tools

1. Windows NT では、Server Utilization グラフに表示されるサーバーの総数は、定数値として示される場合があります。NT ではサーバー総数が指定レベルを常に超えていると認識するため、指定レベルを超えると発生するイベントの妨げとなります。（Bug#1307809）
2. E-Business Management Tools のレポート作成機能を使用するには、PERL バージョン 5 以上が必要です。
3. Solaris 上で Web サーバーを監視する場合は、次のようにします。Performance Manager で、クライアントが Server Utilization/Idle Servers グラフへナビゲートし、右画面の「説明」データ項目にマウス・ポインタを置くと、Data Gather は切断します。クライアントでは、ArrayOutOfBounds Exception のエラー・ダイアログ・ボックスが表示されます。次善策としては、Web サーバーから切断し再接続します。（Bug#1392143）
4. ログ分析レポートの「出力ディレクトリ」パラメータを設定する際には、通常 1 つの円記号 (¥) で終了するパス名は、円記号 2 つ (¥¥) あるいは円記号なしで終了してください。

例:

C:¥ではなく、C:¥¥と入力します。

C:¥temp¥ではなく、C:¥temp¥¥または C:¥temp と入力します。

(Bug#1378763)

7. Oracle Tuning Pack

7.1 新機能

SQL Analyze リリース 2.2 には、次の機能が追加されました。

- パフォーマンス特性比較: 1つのパフォーマンス特性比較ウィンドウで、複数の EXPLAIN PLAN の統計を表示できます。
- SQL Analyze ユーザーは、SQL Analyze から SQL Analyze セッションの操作環境を変更できるようになりました。

これにより、EXPLAIN PLAN を表示する前に、変数を変更するための SQL または PL/SQL の発行、ストアド・プロシージャの呼出し、他の要素の操作が可能です。

Tablespace Map および Reorg Wizard リリース 2.2 には、次の機能が追加されました。

- Tablespace Map のズーム・アウトおよびズーム・インにより、ユーザーはマップの解像度を変更できます。ズーム・アウトでは、マップ・ウィンドウ内に表領域全体を表示します。ズーム・インでは、マップ・オブジェクトのサイズを大きくし、マップをナビゲートするスクロール・バーを表示します。
- Tablespace Map では、表領域分析レポートに基づき、再編成の対象となるセグメントを自動的に選択します。
- Tablespace Map からの Reorg Wizard の起動は、いくつかのセグメントを選択するか、あるいは表領域全体のどちらの状態からでも可能です。
- 統合化表領域分析レポートには、表領域で検出されたセグメント問題がすべて示されます。このレポートは、HTML ファイルとして保存できます。
- Tablespace Map の「分析」オプションは、ユーザーが指定したエクステンント数を超えるセグメントの検出など、ユーザーによる設定が可能です。
- 連鎖行は、全体のオブジェクトを再作成せずに Reorg Wizard で修正できます。

7.2 警告および既知の問題

7.2.1 SQL Analyze

1. SQL Analyze では、他の Oracle Tuning Pack アプリケーションと共有するデータ・リポジトリを使用します。このリポジトリは、複数のユーザーが複数の Tuning Pack アプリケーションから読み込みできます。リポジトリに最後に保存したユーザーが、前のデータを上書きします。このため、同時にオープンする Tuning Pack アプリケーションからリポジトリ操作を実行する際には注意が必要です。これに関する既知の問題 (Bug#778225) には、次のようなステップがあります。

- 1) SQL ノードのデータベース・サービスを含む SQL Analyze リポジトリをオープンします。
 - 2) SQL ノードのリストを拡張する前に、Oracle Expert ナビゲータから同じデータベース・サービスを削除します。
 - 3) SQL Analyze でデータベース・サービスの SQL ノード・リストを拡張しようとする
と、アプリケーション・エラーが発生します。
2. SQL Analyze にログインするユーザー・アカウントには、特定のオブジェクト権限が必要です。SQL の監視およびチューニングに必要な権限を SQL Analyze ユーザーに賦与するデータベース・ロール (SQLADMIN) を作成できます。このロールは、`oracle_home¥sysman¥admin` ディレクトリにある `VMQROLE.SQL` を実行して作成します。
3. ユーザーのスキーマに `PLAN_TABLE` という計画表が存在しない場合、SQL Analyze ではユーザーに `PLAN_TABLE` を作成します。このためには、ユーザーが計画表を作成する権限を持っている必要があります。ユーザーにこれらの権限がない場合、SQL Analyze では表の作成を試行して失敗します。ユーザーは、アプリケーションを終了し、表あるいは `PLAN_TABLE` を作成する権限を取得して SQL Analyze を実行する必要があります。
 4. SQL Analyze はマルチスレッドです。デフォルトでは、各セッション当りの最大スレッド数は 3 です。スレッド数を増減するには、SQL Analyze の「表示」メニュー「作業環境」で、ユーザーごとのデータベース・セッション数を設定してください。許容される最小値は 1、最大値は 10 です。
 5. 「SQL 履歴」機能は、SQL キャッシュから収集されたデータベース・サービスに関連する SQL 文のリポジトリです。SQL 履歴は SQL Analyze と Oracle Expert で共有されます。Oracle Expert から SQL 履歴を保存した場合、この SQL 履歴は SQL Analyze でも使用可能です。SQL Analyze で、事前に保存した SQL 履歴のないデータベース・サービスの SQL 履歴をオープンすると、SQL Analyze によりそのデータベース・サービスの SQL 履歴が作成されます。「SQL 履歴」オプションのデフォルト設定では、再帰的 SQL (Oracle で生成される SQL) を除外します。このため、SQL キャッシュに SQL アプリケーションが存在せず、除外した再帰的 SQL を選択した場合、新規 SQL 履歴は空白になります。
 6. SQL Analyze の実行中にスキーマ・オブジェクトを変更する (Schema Manager で索引を追加する場合、SQL Analyze のその後の操作では、自動的にこれらの変更が使用されます。ただし、SQL Analyze のオブジェクト・プロパティで変更を表示するには、「リフレッシュ」ボタンで「オブジェクト・プロパティ」ビューをリフレッシュする必要があります。
 7. SQL Analyze から実行された問合せで取得されたデータ結果セットは、「実行結果」ツールバー・ボタンで表示できます。データへの高速アクセスを可能にするために、結果セットは SQL Analyze によりローカル・メモリーに格納されます。キャッシュに入れる行数は、SQL Analyze の「表示」メニュー「作業環境」「実行結果」の設定で、ユーザーが制御できます。この設定で、表示する行数を制限したかどうかを確認してください。キャッシュに入れる行数が多いと、プログラムでメモリー不足が生じる可能性があります。

8. SQL Analyze の「ファイル」メニューにある「SQL をオープン」の制限事項は次のとおりです。「SQL をオープン」ファンクションでオープンされた SQL ファイルに含まれる SQL 文は、各文が改行で始まり、セミコロンで終了する場合に限り、SQL Analyze にインポートできます。SQL ファイルには、REM で始まる SQL コメントを入れることができません。
9. ファイルから SQL 文をロードし、SQL 文の解析でエラーが発生すると、SQL Analyze では、エラー発生前に解析に成功した文のみ表示します。不適切な SQL 文に続く文は表示されません。
10. TopSQL には、再帰的 SQL 文を除外するオプションがあります。ただし、SYS ユーザーとしてログインした場合、TopSQL では非再帰的 SQL 文も除外します。そのため、SYS としてログインする場合は、再帰的 SQL 文を除外するオプションを選択しないでください。
11. SQL Analyze では、ユーザーが実行した SQL 文の EXPLAIN PLAN を作成できます。これは、オブジェクト名とスキーマ名を検証することにより可能です。オブジェクトが複数のスキーマに属する場合、ユーザーと対話してスキーマ名を解決します。ただし、パブリック・シノニムは修飾できません。そのため、パブリック・シノニムを含む EXPLAIN PLAN を取得する際、スキーマに表、ビューまたはプライベート・シノニムが存在すると、取得する EXPLAIN PLAN は他のユーザーが参照するものとは異なる場合があります。
12. 表示定義のダイアログは、構文的に有効な SQL 文から選択した表示名を表示する場合に限り、使用できます。
13. SQL チューニング・ウィザードでは、MINUS および UNION を含む問合せの簡便チューニングで、列リストに「*」を含む文をサポートしていません。次善策としては、問合せに列名を列挙します。
14. Oracle8 のプラン・スタビリティ機能を使用した SQL 文に関しては、次のとおりです。1/ TopSQL 機能、2/ Diagnostics Pack Performance Manager アプリケーションからの SQL Analyze チューニングの起動、3/ SQL ファイルからのエクスポートのいずれかにより SQL Analyze に送られた SQL 文は、プラン・スタビリティ機能で自動的にチェックされます。SQL 文に安定計画アウトラインが検出された場合、ユーザーはこの情報に関する通知を受け取り、SQL Analyze でこの文を処理できません。この自動チェックでは、SQL 編集ウィンドウにコピーまたは手動で作成された安定 SQL 文を除外するので、注意してください。
15. SQL Analyze のナビゲータに SQL 文を追加した場合、付与される SQL 文の番号が連番でない場合があります。(Bug#1723321)
16. SQL Analyze の PL/SQL の実行画面で、「実行」「閉じる」「ヘルプ」ボタンがマウスから正常に選択できません。この場合、キーボードの Tab キーでメニューボタンを選択し、Enter キーで実行させてください。(Bug#1787576)

7.2.2 Oracle Expert

1. Oracle Expert では、収集を実行するためにチューニング中のターゲット・データベースに、次の表が存在するものと想定します。 収集中にこれらの表 (dba_tab_column、dba_constraints、dba_users、dba_data_files、dba_objects、dba_indexes、dba_segments、dba_ind_columns、dba_tables、dba_rollback_segs、dba_sequences、dba_views、dba_tablespace、dba_synonyms、dba_ts_quotas、dba_clusters) のいずれかが存在しない場合、エラーが発生する可能性があります。
2. 現在、同一リポジトリに対して複数の Oracle Expert セッションを実行できます。 Oracle Expert では、セッション間のデータ衝突を避けるための完全サポートを提供していません。 リポジトリに対して同時に複数のセッションを実行しないでください。 ただし、複数のセッションの実行が必要であれば、各 PC セッションで異なるチューニング・セッションにアクセスしてください。
3. Oracle Expert の「自動チューニング」機能を使用するには、まず Oracle Expert のナビゲータ・ウィンドウからデータベースを選択します。 起動後、自動チューニングでは、選択したデータベースに対して「自動チューニング」メニュー 「停止」機能を起動するか、システムを再起動するまで実行を続けます。「自動チューニング」機能を使用するには、Oracle Expert を Oracle Management Server に接続して起動する必要があるので注意してください。 (Bug#1359935)
4. SYS または System スキーマのチューニングに Oracle Expert を使用しないでください。
5. 同スキーマ内の表およびクラスタが同じ名前の場合、スキーマ収集は完了前に中断します。 (Bug#604088)
6. SQL 文が 8KB を超える場合、この文を含む要求を編集しようとするエラーが発生します。「表示時のロードの試行中にエラーが発生しました」というエラーが表示されます。「要求」プロパティ・シートは表示されたままですが、SQL テキストは非表示になります。
7. Oracle Expert では現在、Oracle8 パーティション化機能を使用する表のチューニングをサポートしていません。 パーティション表はデータ収集で無視されます。
8. DB リンクを使用してデータベースに接続する SQL を含むワークロード要求は、DB リンクで参照されるデータベースに対して検証されません。
9. 極端に大きな (数ページにわたる) SQL 文を含む Oracle Expert チューニング・セッション (.xdl ファイル) をインポートすると、Oracle Expert は停止状態になり、その後表示/編集ウィンドウからこれらの SQL 文にアクセスできなくなる場合があります。 (Bug#651722 関連)
10. インポート・ファイル内の 1024 バイトを超えるソース行は、構文エラーを引き起こす可能性があります。
11. パラメータ構文の変更により、Oracle Expert では、Oracle8i Server リリース 8.1.6 に対して BUFFER_POOL_KEEP および BUFFER_POOL_RECYCLE パラメータに不適切な推奨

事項を示すことがあります。この2つのパラメータに対するチューニング・アドバイスが必要であれば、リリース 8.1.6 初期化ファイルでリリース 8.1.5 パラメータ構文を使用して潜在的エラーを回避できます。この2つのパラメータに対するリリース 8.1.5 パラメータ構文は次のとおりです。

- BUFFER_POOL_KEEP=(buffers:nnn, lru_latches:nnn)
 - BUFFER_POOL_RECYCLE=(buffers:nnn, lru_latches:nnn)
- (Bug#1357057)

12. データ収集中、「Oracle Expert インスタンス収集」画面のチューニング・セッション名が文字化けして正常に表示されない場合があります。(Bug#1793680)

7.2.3 Tablespace Map および Reorg Wizard

1. Tuning Pack のバージョン 2.1 以前のリリースに存在する Oracle Tablespace Manager アプリケーションは、Tablespace Map および Reorg Wizard という2つの新しいアプリケーションに置き換えられました。
2. Reorg Wizard では現在、索引構成表、ハッシュおよびコンポジット・パーティション、ユーザー定義タイプの列を含む表、ユーザー定義タイプの列に対する索引、ファンクション索引、ドメイン索引オブジェクトに対する再編成をサポートしていません。LOB 列を含むパーティション表はパーティションごとに再編成可能ですが、パーティション・オブジェクト全体の再編成が必要な操作（表領域全体の再編成など）は、パーティション・オブジェクトがLOB 列を含んでいる場合実行できません。サポートされていないオブジェクトを含む再編成を実行すると、影響サマリー・レポートおよび Reorg スクリプトに診断メッセージが表示され、これらのオブジェクトについて警告します。
3. 状況によっては、影響サマリーおよび Reorg スクリプトの取消しに時間がかかる場合があります、この間アプリケーションは応答しない状態になります。
4. 再編成ジョブの実行は、スクリプトが NOVALIDATE 状態にある制約を持つ表の再編成を含んでいる場合、失敗することがあります。
5. Reorg Wizard を使用して、32KB を超える LONG または LONG RAW データ型を含むデータベース・オブジェクトを再編成するには、オブジェクトが配置されているサーバー上で Intelligent Agent リリース 8.1.6 を使用します。
6. 実行中に再編成ジョブが失敗した場合、再編成操作はリカバリできます。詳細はドキュメントを参照してください。
7. スクラッチ表領域を使用して、再編成に使用する一時オブジェクトを保持する場合、スクラッチ表領域および本番表領域の管理タイプは同じである必要があります。両方とも、ディクショナリでの管理あるいはローカルでの管理とします。